

## 令和元年度 第1回 公立大学法人長野県立大学評価委員会

日 時：令和元年7月16日（火）

10：00～12：00

場 所：長野県立大学

公立大学法人長野県立大学

三輪キャンパス大会議室

### 1 開会

#### ○新井企画幹

それでは皆様お集まりですので、ただいまより「令和元年度第1回公立大学法人長野県立大学評価委員会」を開会いたします。

私は本日の進行を務めさせていただきます、県庁高等教育振興課の新井と申します。よろしく願いいたします。

それでは開会にあたりまして、県民文化部の増田部長よりごあいさつを申し上げます。

### 2 挨拶

#### ○増田県民文化課長

おはようございます。日頃、委員の皆様方には大変お世話様になっておりまして、どうもありがとうございます。

今回は令和元年度第1回の公立大学法人長野県立大学評価委員会ということで、大変お忙しいところ、ご出席をいただきまして御礼を申し上げます。

お集まりいただきまして、ありがとうございます。

委員の皆様方には、大変貴重な御意見をちょうだいしておりまして御礼を申し上げます。本日はありがとうございます。

また、大学、それから事務局の皆さま方には、初年度ということで、業務実績案をまとめるのにご苦労申し上げていると思いますけれども、ご検討、それから作業、まだまだ続いていることと思いますが、まずはありがとうございます。また、金田一学長を初め、委員の皆様方、どうもありがとうございます。

申し上げますまでもありませんが、本日の説明、それからこの後のヒアリングを含めて、数回の委員会をお願いすることになるかと思うんですが、その上で評価委員会としての意見をおまとめいただき、県にご報告をいただきまして、それをもとに県としての評価を固めまして、9月の県議会に報告をしたいと思っているところでございます。

今回が初めての評価ということで、評価がしづらいという点もあろうかと思っておりますけれども、ぜひ将来に向けた、とても大切な事業評価でもございますので、分量もありご負担をおかけいたしまして大変恐縮ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

○新井企画幹

ありがとうございました。続きまして、長野県立大学の金田一学長から、ごあいさつをお願いしたいと思います。

○金田一学長

本日はお忙しい中、長野県立大学の評価委員会にご出席いただきまして、ありがとうございます。

評価委員の皆様には、本当に日頃からご理解、ご協力等をいただいておりますこと、御礼を申し上げます。

本日、安藤理事長は、海外出張のために出席できておりません。代わりに、私のほうから簡単にあいさつをさせていただきたいと思います。

まずは、ここにお越しただいて2度目になりますが、その窓から見えにくいんですけども、南側は、やっと旧校舎が全てなくなりまして、ちょっと広々とした風景が見えるようになっております。やはりうちの大学の顔でもありますので、この南側が大きく広がりますところを、是非帰りでも見ていただければと思います。

あと半年ほど植栽その他の工事がかかりますけれども、この大学もやっと素晴らしいキャンパスになるかなと思っております。

本日は業務実績の評価・報告をこの後、直接、評価していただくということになっておりますが、私からは、うちの大学の看板でもあります、海外研修につきまして簡単に報告をさせていただきたいと思います。

うちでは9つのコースがありますけれども、その最初のコースでありますスウェーデンのウプサラ大学での研修を5月31日からスタートしまして、それを皮切りに今8つの、大学で研修に行っているところでございます。そのうち7つは既に学生が帰国いたしました。大きな事故もなく、帰ってきたところでございますので、本当に安心している次第でございます。海外から既に帰ってきておりますけれども、学生たちに聞きますと大変満足しているという意見が多かったのが、印象的でした。

それから引率した先生方の意見を聞きますと、やはり以前に比べて何か遅くなったような気がするという意見、それから英語で話すということもありましたので、英語力が更に増したのではないかという意見が出ておりました。これを今後の授業での糧にしていきたいと思っております。

そういうことで、本当に順調に進んでいることなのですが、その中にもやはり初めてということで、幾つか問題点もございます。その課題はぜひ今後検討して、来年度に向けて準備をしていきたいと考えております。

本日は、評価委員の皆様にはいろいろとお忙しい中、ご審議していただくということになるわけですが、今後とも一つ、ご支援をよろしく願いいたします。以上、私のあいさつとさせていただきます。本日はどうかよろしく願いいたします。

○事務局

ありがとうございました。本日は全員の方にご出席いただいておりますので、ご報告いたします。

なお、本日の議事は、後日、公開させていただく予定であります。ご発言につきましては録音させていただいておりますので、ご発言の際は、係員がお持ちいたしますので、マイクをご使用いただきますようお願いいたします。また、本日の委員会は、遅くとも12時までの会議を予定してございます。

それでは、以降の議事の進行を、山沢委員長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

### 3 議 事

#### 公立大学法人長野県立大学の平成30年度業務実績について

##### ○山沢委員長

おはようございます。今、先ほど第1回ということでございます。

第1回が大学の評価の業績のお話を聞くということで、まとめるに当たってはもちろん教育の皆さんもそうですけれども、事務方も大変苦労されたのではないかと思います。

これからずっと続いていく県立大学の第一歩ということでございますので、ご苦労にきちんと応えるという意味でも、委員の皆様方の忌憚のないご意見を、今回もよろしくお願い申し上げます。

それでは、次第の3にございますように、公立大学法人長野県立大学の平成30年度業務実績について、法人側からご説明をいただくというところから始めたいと思います。

それでは、よろしくお願い申し上げます。

##### ○長野県立大学事務局

長野県立大学事務局の逸見と申します。資料3の、平成30年度公立大学法人長野県立大学の業務の実績に関する報告書、今後、報告書と申しますけれども、これによりまして、業務の実績等をご説明いたします。では、座ってご説明させていただきます。

まず、報告書の構成ですけれども、1ページと2ページに大学の概要を記載しております。続いて3ページから5ページにかけて、平成30年度事業実績の概要を記載しております。その後、26ページにかけまして、平成30年度計画の、項目別の業務の実績等を記載しております。

続きまして、27ページから30ページにかけまして予算、収支計画及び資金計画、平成30年度計画の項目につきまして、こちらは実績のみ記載してございます。

最後に31ページから38ページにかけまして、本学の特長的な取り組みを、教育研究等の質の向上に関する特記事項として記載してございます。

それでは、報告書の6ページからの、項目別の業務の実績等について、順次、説明してまいります。

左から中期計画、平成30年度計画と、これに対応いたします平成30年度計画の進捗状況、あと、法人自己評価を記載してございます。

こちらの自己評価につきましては、一つ前の、5ページの右下に記載の評価基準によりまして、本学の自己点検委員会がs～dまでの5段階で評価を行ったものでございます。

では初めに6ページの第2「教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべ

き措置」をご覧ください。

まず1、教育の(1)人材育成の方向でございます。右から2つ目の判断理由、平成30年度計画の進捗状況という欄をご覧くださいけれども、こちらの3つめのポツですが、発信力ゼミ等の総合教育科目におきましては、プレゼンテーションやディスカッションを含む授業を実践いたしまして、学生の主体的な授業参加を促したところでございます。

その下のポツですが、本学の教育の特長の一つでもあります発信力ゼミにつきましては、関心のあるテーマに応じて、全15クラスに分かれ、16人前後の少人数で実施いたしました。

最後にゼミの発表会を行いまして、学生のプレゼンテーション能力の向上を図ったところでございます。

続いてその下のポツですが、もう一つの特長であります英語集中プログラムにつきましては、学生の英語力を勘案して、全10クラスにわたりまして、英語力をバランスよく向上させていく授業を、1クラス24人から26人の少人数で実施したところでございます。

次に9ページにまいりまして、(2)の入学者の受入れでございます。

入学者の受入れの2つ目のポツですけれども、入試方法の取り組みといたしまして、県内高校を中心に、高校での説明会や模擬授業などを積極的に開催いたしました。

このほか、オープンキャンパスを3回、実施いたしまして、延べ約3,000人の来場があったところです。こうした積極的かつ効果的な活動を展開した結果、志願者数は、例年度比約1.7倍と大幅な増加となりました。

こうした点を評価いたしまして、こちらの項目はs評価とさせていただきます。

次に10ページにまいりまして、(3)の教育の質の向上等でございます。

一つ目のポツですが、成績評価でGPA、成績評価値を用いまして学習成果の可視化を行いました。合わせて、GPAに基づき、成績優秀な学生を表彰する制度を設けまして、今年度は3学科15人を表彰したところでございます。

次に11ページにまいりまして、11ページの下から2つ目のポツですけれども、FD研修につきましては2回実施したところでございます。しかしながら、1回以上参加した教員の割合が62%にとどまりまして、目標の100%を十分達成できなかったため、こちらの項目はc評価とさせていただきます。

続いてその下のポツですが、開講した188の全ての授業で授業改善アンケートを実施いたしました。教員にアンケート結果を提供いたしまして、授業の改善につながるよう促したところでございます。

次に12ページにまいりまして、(4)の学生への支援でございます。

学生への支援の一つ目のポツですけれども、1年次全寮制の成果を高めるため、寮生の生活、学習等の基本方針を定めました。この方針に基づき、さまざまな機会を通じて生活指導や学習指導を行いました。また、寮生の学習や生活実態についてのアンケート調査を行いまして、寮運営に生かしたところでございます。

次に2つ目のポツですが、寮生の自立的な生活力を高め実行していくための寮生組織である、ユニットリーダー会を設置しました。合わせて、象山未来塾やサービ斯拉ーニングといった学習プログラムへの寮生の参加を促しまして、寮生の高い満足度が得られたところでございます。

続いてその下のポツですが、寮生が自主的に協調して生活できるよう、上級生がレジデ

ント・アシスタントになって、下級生を支援する体制を構築しました。1年次の学生の中から希望者を募集しまして、2019年度のレジデント・アシスタントの候補者、25人を決定したところでございます。

続いて、13ページの一番上のポツですけれども、就学困難な学生を支援するため、授業料減免を実施するとともに、日本学生支援機構の奨学金制度を活用しました。これに加えて、海外プログラムにつきましては、日本学生支援機構の海外留学支援制度協定派遣への申請を行いまして、5プログラム、計53人、約400万円の給付型奨学金の枠を得ることができました。こうした点を評価いたしまして、こちらの項目はs評価とさせていただきます。

続いてその下のポツですが、学生の健康診断受診率につきましては、目標どおり100%を達成いたしました。

次にキャリア支援の項目をご覧いただきますが、まず、6ページにお戻りいただきます。

6ページの上から2つ目のポツをごらんください。新入生全員が、学長と一人5分ずつ、個人面談を行いました。面談にはキャリアカウンセラーが同席しまして、進路指導に関するアドバイスを行うとともに、全員の希望進路と4年間の目標を確認いたしました。さらに面談時の情報をもとにキャリア・進路支援計画を策定したところでございます。

では再び14ページにお戻りください。この学長面談の際にキャリア支援に関するアンケートを実施しました。この結果を分析いたしまして、キャリア支援プログラムの検討を行いました。一例を挙げますと、県内、40社程度の県内優良企業の協力を得まして、本学独自の民間支援プログラムを構築したところでございます。

以上、申し上げました2つの項目については、目標を上回る成果が得られたと判断しましたので、s評価とさせていただきます。

次に15ページにまいりまして、2番の研究でございます。

まず(1) 特色ある研究の推進の取り組みといたしましては、学長裁量経費を活用しまして、公募により研究費を配分する制度を構築しました。准教授以下の若手教員の研究を中心に、21件の研究を採用しました。このうち、地域課題の解決に資する研究が9件ありまして、具体的には地域活性化とか、地場の産業振興などの課題に取り組んだところでございます。

次に16ページにまいりまして、(2)の研究費の確保でございますが、こちらの取り組みとしましては、一つ目のポツですが、科研費ワークショップを実施いたしまして、科研費の申請率の向上を図りました。合わせて、図書館に外部資金獲得のノウハウを紹介した書籍を収蔵して、研究者の便宜を図ったということになります。この結果、継続者を除いた申請率は、55%となったところでございます。

次に17ページにまいりまして、3の地域貢献でございます。

まず(1)の産学官連携の取組としましては、1つ目のポツですが、地域イノベーションの実現に向け、企業、大学、県・市町村、金融機関等と連携しましてさまざまな取組を行いました。

具体的には県内4市との包括連携協定の締結、県及びIT企業との連携協定の締結、小布施町や健康関連企業等との連携による地域の健康づくりに関する取組などを行ったところでございます。目標を上回る成果が得られたと判断しましたので、s評価とさせていただきます。

だいております。

続きまして、(2)の地域連携の取り組みとしましては、まず1つ目のポツですが、ソーシャル・イノベーション創出センターが地域の取組等と連携しまして、事業者、創業者等の支援を行いました。具体例としましては、アドバイザー・メンバーが飯山市と長野市の2つのプロジェクトを支援した取組が挙げられます。

次に18ページにまいりまして、上から2つ目のポツですが、本学の教職員がコーチを努める専門職起業塾や信州ソーシャル・イノベーション塾などを随時開催しまして、地域に開かれた大学として、多様な学びの機会を提供したところでございます。

さらにその下のポツですが、4人の地域コーディネーターの協力を得まして、地域との関係づくりを進めました。地域づくりの取り組みの収穫となる、県内各地域のコワーキングスペースにも積極的に訪問しまして、関係づくりに取り組んだところでございます。

以上、地域連携の3つの項目につきましては、目標を上回る成果が得られたと判断しましたので、s評価とさせていただきます。

次に、同じく18ページの4、国際交流でございます。

海外プログラムにつきましては、研修先となる6カ国7校、全てを訪問しまして、研修中の学習及び生活について調整を図りました。また、2019年度の派遣に向け、学生の派遣先を決定したところでございます。

これに関連しまして、8ページにお戻りいただきます。8ページの上から2つ目のポツですけれども、海外プログラムの学習効果を高めるため、海外研修先に応じた県内企業や団体等への訪問、研究を実施したところでございます。

では、再び19ページにお戻りください。

19ページの一番上のポツですが、アジア諸国を中心に交流協定、交換留学協定の締結や、留学生の受け入れにつながる活動を展開しました。その結果、中国の華東師範大学との学術交流協定の締結したところでございます。

続きまして、第3の業務運営に関する目標を達成するためのとるべき措置から第6のその他、業務運営に関する目標を達成するためのとるべき措置につきましては、主な項目をかいつまんで御説明します。

初めに19ページの第3の1、運営体制の構築の1つ目のポツでございます。

原則として週1回、年にしますと46回となりますが、大学運営会議を開催いたしまして、学内における迅速な意思決定を行ってきたところでございます。

次に20ページにまいりまして、2、組織・人事運営の(1)研修及び人事評価の1つ目のポツでございます。

SD研修としまして、本学職員と公立大学協会職員による交流及び意見交換を行い、大学職員としての心構えを学んだところでございます。しかしながら、参加した職員の割合が60%にとどまりまして、目標の100%を十分達成できなかったため、こちらの項目はc評価とさせていただきます。

次に21ページにまいりまして、第4の財務内容に関する目標を達成するため取るべき措置の1、自主財源の増加の項目でございます。

近隣企業等から寄付金として3件、約270万円を獲得いたしました。また、古本の寄付を通じた寄付金制度を導入いたしまして、本学の自主財源の増加を図ったところでござい

す。

次に22ページにまいりまして、第6のその他業務運営に関する目標を達成するためとるべき措置の1番、施設整備の整備、活用等の項目でございます。

1つ目のポツですが、図書館につきましては、平日に加え、土曜日も開館日といたしまして学内の方が利用できるようにいたしました。

このほか、大学の食堂の利用を一般に開放いたしまして、近隣にお住まいの方など、県民の皆様が食堂を利用できるようにしたところでございます。

最後に3番の法令遵守の項目でございます。

25ページの一番上のポツでございますけれども、学内のハラスメント事案の防止をするため、ハラスメント事案にかかる相談窓口の設置を行うとともに、相談員を複数配置いたしまして、学生や教職員が相談しやすい体制を整えました。合わせて、学内メール等により、学生や教職員に広く周知を行ったところでございます。

26ページは、目標値を定めた項目についての実績等を、再度掲載したものでございます。

では次に31ページからの、教育研究等の質に関する特記事項をご覧くださいませ。こちらについても、主な項目をかいつまんでご説明いたします。

まず初めに、31ページの3の象山学でございます。1年次に開講される象山学ですが、こちらは本学の安藤理事長を含め、13名の企業家や経営者等をゲストスピーカーとして招きまして、全14回の講義を行いました。第一線で活躍している方々から、現実のさまざまなチャレンジに向き合う姿勢等について学ぶことを目的とした授業科目でございます。

次に、同じく31ページの4番の健康発達実習でのフィールドワークでございます。

こちらは健康発達学部の1年次必修の学部共通科目でございます。写真は稲刈りの様子でございますが、平成30年度は農業体験とか自然観察を行いまして、学園祭で収穫物の販売までを行ったところでございます。

次に32ページの左下の9番、「Eminent Speakers' Forum on Global Development」、でございます。

本学では、少人数教育と包括的な英語教育を通じてグローバルな視野を持ち、国際的な発信力のあるリーダーを育成すべく、研究に取り組んでおります。その一環としまして、本学教員が理事長裁量経費を活用しまして、国内外の著名な研究者や実務家による英語での連続講演会を立ち上げました。

今年1月に第1回目を開催いたしまして、今年度においても、引き続き引き続き実施しております。

次に33ページの右下の③の地域イベントへの参加協力と、地域連携の取組でございます。

一例を挙げますと、長野祇園祭が、昨年7月8日に長野市中心市街地で行われました。象山寮の地元地区からの参加依頼を受けまして、寮生約80人が、事前準備も含め祭りに参加しまして、地区の伝統行事を盛り上げたところでございます。

ちなみに、今年度については、7月の13日と14日の祭りに、約50人の学生が参加したところでございます。

次に、36ページの5番の地域貢献でございます。36ページでは、先に17ページから18ページで御説明いたしました地域貢献の主な取組について、その詳細を記載してございます。

次に、37ページにまいりまして、その左下ですけれども、こちらは、平成30年度の地域

連携相談等件数でございます。

開学初年度の平成30年度に市町村、企業等から500件を超える相談等が本学に寄せられたところでございます。こちらの表は相談ごとと、相談内容の件数をまとめた表でごらんいただきます。ご覧いただきますとおり、行政からの相談が約半数を占めているというところでございます。

次に38ページの、2019年度海外プログラムの概要をご覧ください。

2年次に行う海外プログラムにつきまして、全9プログラムの対象学科、期間、研修先大学等を記載してございます。現時点では、うち7プログラムが終了しておりまして、グローバルマネジメント学科のイギリス・レスター大学のプログラムが現在、実施中でございます。

海外プログラムは4週間かけて行いますけれども、一例としまして、その下にグローバルマネジメント学科の研修ステージの例をお示ししてございます。

以上、駆け足でご説明してまいりましたけれども、平成30年度の業務の実績に関する報告書についての説明は、以上でございます。よろしくご審議をお願いいたします。

#### ○山沢委員長

ご説明ありがとうございます。大体、時間が、このあと1時間近くございますので、ゆっくりと議論をよろしくお願ひします。

どういう形がいいかというのはあまり考えないで、皆さんもう、随分予習もされたと思いますので、委員の皆様にも適宜、ここはどうだということ、ご遠慮なく手を挙げてご質問いただくという方法でいきたいと思ひます。なるべく最後まで行いたいと思ひています。

どうぞご遠慮なく、重要とかそういうのではなく、ページの前のほうからでもかまいませんし、そこはご自由にご発言をよろしくお願ひ申し上げます。どうぞ。

#### ○生駒委員

生駒でございます。まず、評価委員会の行う業務実績評価は、法人が自己評価を行った業務実績報告等に基づき行うという立付けになっています。すなわち自己点検評価が前提になっておりますので、自己点検評価が、きちんと行われていることが重要なキーになると思ひます。

そこで、この自己点検・評価の体制についてご説明いただければと思ひます。自己点検委員会は今まで、5月23日までに3回開催されたとお聞きしておりますが、その後、この報告書決定までにどういう評価とか結果のプロセスがどうだったかということと、この委員は4名でしたかね、自己点検評価委員会は、職員を含めて5名でしたか、その方だけの評価でこの判断というか、これが完結するものなのか、あるいは学長や、学部長も踏まえて最終結果にするものなのか。報告書は、長野県立大学名で出されていますけれども、これは理事長が最終決定権者、最終責任者ということになるのでしょうか。それとの関係で、自己点検・評価は誰の責任でなされたものなのかということをお伺ひしたいと思ひます。

#### ○玉井専務理事兼事務局長



事務局長の玉井でございます。自己点検の流れということだと思いますけれども、自己点検委員会でまずは自己点検をどうやってやるのか、あるいは自己評価の基準をどうするかというのを、原案をつくっていただく中で学長に報告され、それで大学運営会議という、理事長、学長、私、両学部長が入る会議においてそれを定めます。

最終的には業務実績報告書の評価ということについては、経営審議会で法定審議をしているところでございます。ですので、組織的に検討し、決定していただくということでございます。

○山沢委員長

生駒委員、よろしゅうございますか。

○生駒委員

膨大な作業になったと思うんですが、法人事務局の方が、あるいは委員の方が中心になって進められていると思うんですが、その過程をもう少し詳しく教えてください。何回開催されたんでしょうか。

○玉井専務理事兼事務局長

自己点検委員会としては3回かと思います。ただ、その作業だけで終わるものではなくて、その期間ずっと事務局で全組織を挙げて資料を収集する。それは学部、教員の皆さんにもお願いをして、実績の証拠となるような資料を収集して、それに基づいてこの業務実績報告書ができているということでございます。

ですので、委員会の方針を定め、あと事務局と学部長、学長で、資料をもとに実績ごとにつくり上げたという形でございます。

○山沢委員長

よろしいですか。はい、ほかにどうぞ。

いいですか、ちょっと細かな話なのでまずやりませうかね。このくらい細かい、今後の話を、10ページですね。教育の質の向上等という項目が、という項目があるんですが、その第1番目で、評価がbになっているんですけども、GPAを使って、これ大体、開学1年目の2回目の入学式で成績優秀者を表彰するというのは、私は初めてでちょっと驚いたんですけども、その根拠はちゃんとGPAで、GPAもいろいろなところ悪いところとあるんですけども、評価という意味では、aで当然の項目なんですけれども、なぜbなんでしょう。

○金田一学長

ありがとうございます。GPA評価というものが大変重要であるという、昔からの布石もありましたので、それに合わせようと思ったんですが、確かに1年目は平準化ということは大変難しい、学部によってもかなり違いがあったと。

やはり少人数とかゼミや何かは割と点数が高くなるんですけども、大授業、大きな教室とかそれから実験とか、やはり適切になってしまうものもございます。

そういうことで公平にということもあったんですけども、GPAだけだと若干難しい点があって、その辺は学部によって、多少修正はされてございます。しかし、やはり毎年、1年生、2年生、3年生、頑張った学生には何とかしたいという思いがあったものですから、モチベーションを高めるために実施したということでございます。

#### ○事務局

委員会の、自己点検・評価委員会の議論の中身ですけども、聞いていますのはこの年度計画が出ているなど、その検証や課題の整理を行いということが達し得なかったということを知っている。要するにGPAはできたんですけども、それはちょっと今年度に残っていると、そう私は知っているということでもあります。

#### ○山沢委員長

すると、それにつきましてはGPAへの評価がそうですね。何年やってもよくわからないですね。学生のほうも賢くなりますけれども。

#### ○生駒委員

今のご発言に関連してよろしいですか。成績評価についてですが、これは以前にも質問をしていることですが、事後的に正確性の検証が可能かという点についてです。

多くは、私の経験からすると、その担当教員の裁量に委ねられているということはわかるんですが、この採点、教員の採点が、恣意的というようなことを申し上げるつもりはないんですが、答案の各ページ毎の点数の集計とか、成績を学席番号順に入力する、そういったときに集計誤りや転記誤りが生じる危険性があるんですね。それを、そのチェックする体制はどうなっているかと。

これは学年末試験に限らず、入学試験において同様のミスが起こり得る懸念もある、その人の一生にかかわることなので、それについても間違わないようなチェック体制が取られているのかということについてお聞きしたいんですが、いかがでしょうか。

#### ○金田一学長

まずは、学生から異議申し立てを受けるというところから一つ、大きくあると思うんです。

教員についてはそういうことで、反省文を書かせるとか、いろいろやらせる、詰めるのですけれども、一応、先生と学生との関係はそういうことでございます。職員については、私のほうではよくわからないのですが、もしありましたら、お願いします。

#### ○事務局

成績につきましては、今、素点でやっております。0点から100点までの点数を入れて、それで入力して、S、A、B、C、あとGPAというのが計算されるわけで、素点のときに先生方の入力を、もう一度、我々のほうで調べるといえるのは、テストの解答用紙も全部いただくということになりますので、事務局では、再度、点検はしていないんですけども、先生方の素点入力の際に、確実に先生方が何度も何度もチェックをしていただいて、

その素点も入力しながら、S、A、B、Cを決めていくという形には、今、現行はなっておりません。

それも現在、素点は上位から並ぶようなエクセルのシステムとかも、今、つくっております。その辺でもう一度、先生方が個人個人の学生と素点を調べてもらうというような形のもので、二重チェックで事務局が回答用紙まで含めてのちょっとチェックは行いませんけれども、素点での確実な入力という形で、今、やっていただいているのが現状でございます。

#### ○生駒委員

もう一点、確認させていただきます。その答案用紙ですね、採点した結果の答案用紙は、多分、教員の方が保管していると思うんですが、それを事務局なりが、大学として回収して、事後的な検証が可能なような仕組みにしておくということはないのでしょうか。

私は試験委員をやったことがありますけれども、2万人分を採点しました。2人の委員で、見返す時間もないんですけれども、見返すと採点ミスがあったり、集計ミスがあったり、いろいろなことに気がついておそろしい思いをしたのです。それで、バックオフィスにそれをサポートしてくれと頼んだのですが、その時は叶いませんでした。事後的にそれは改善されましたけれども、数年経ってからでした。、ですから、このことは非常に不安に思っておりました。試験委員の手元において保管して、それから学生や受験生から照会が来て答える、

現在の仕組みだけではなく、少なくとも試験委員の方、教員の方に事後的なチェックが入る仕組みにしておけば、もし入った場合のことを考えて、自律的な牽制機能が期待できる。、そういうシステムを構築しておく必要があるのではないかと思っているんです。

その試験の場合には、答案が全部、事務局に返却されてすべて保管されるようになっていました。

#### ○金田一学長

個人の問題が多いというのはそうはないのですけれども、レポートは、必ず3年間は保管しておくということになっております。また、試験の答案については、2年間は保管しておいておまして、そういうのは長めに保管しておくというやり方をうちの大学はしています。

#### ○事務局

うちとしてはつくってないですね、先生が保管、2～3年程度の保管という形で。

#### ○玉井専務理事兼事務局長

これは教員保管にするのか、事務局保管かするのか、あるいは7年保管にするのか、もし決めるとすれば、これは全面的に議論が必要ですね。ここでどうこうという話にはならないですね。

それが、成績評価というものに絡めて、どういったことまで必要なのかという議論が必要なのかなと思います。

○山浦委員

いいですか。全体的な評価とコメントのことなんですが。

コメントについてはですね、この数値目標が、達成した、達成しないというのはわかりやすいので、この達成した、達成しないということになるんですけども、大学のほうが数値目標ではないので、事実を何回やったとかとパッと書いてあるのです。同じように事実だけを書いてあるのですが、その結果、aであったりbだったりしているんですが、bであったらどこが足りなかったとか、そういうことをコメントしてもらわないと、結果だけで、bだaだとなってしまうので、その辺のところはどういう判断をされているのかということ、ちょっと心配。

○金田一学長

定性評価について。

○山浦委員

定性評価の中には満足だったとか、不満だったとか、コメントがあればいいんですが。

○玉井専務理事兼事務局長

全部、お答えできるかどうかわかりませんが。

○山浦委員

今日、例えばaが普通だとしたら、bとcとか、sについてだけはきちんと説明してもらって、というふうにやっていただければありがたいと。

○玉井専務理事兼事務局長

例えばこれbだとか、「英語集中プログラム」の8ページでございますけれども、これは、行くことは行った。要するに条件どおり行ったんですけども、その検証としてはいかかかと、検証する仕組みがなかったという意味合いでbだったというふうに私たちとすれば思うんですが。

○山浦委員

例えば、前に戻っていただいて10番という英語のを見ていると、何かやったように見えているんですけども、bとなっているんだよね。

○玉井専務理事兼事務局長

その頃に、いろいろ評価が分かれるところでもあったのですけれども、要するに効果が、効果測定までいかなかったというところですね。

10ページの編入学については、スケジュールにおいてそのまま、先の検討までいかなかったと思いますし、単位互換についても検討を始めたという部分で進めるに十分でないという意味でb、でも、要するに具体的にまだこれからだという、さっきの成績GPAの部分は、これは検証と課題整理という部分に到らなかったということでbだったという形

でしょうか。

あと、16ページまでいきますと、これは効果的に活用した情報発信を行ったら、おそらくホームページの活用が不十分だったという、これはそういう検証はなされた上のb、要するに情報発信を行ったんですけれどもずっと、もうちょっとできたんじゃないかという意味合いのb、だからその下、同じ16ページの、FD、SD委員会の部分については、これは足りなかったということでこれはbだと。

あと、20ページまで行きますが、組織運営のところ、これは人事評価の部分については、プロパー職員評価制度については、昨年度、実施まで至らなかったのがこれはbだったという、そういう状況、検討したということで、今年度スタートしています。

あと、22ページまでいくと情報発信のところ、ホームページを活用しての情報発信が、なかなか効果的にできなかったという、これは反省を踏まえてのbです。ホームページは開学と同時に立ち上がってはいたのですが、なかなか活用がなく、十分ではない意味合いで、とりあえずbだけ説明させていただきました。

○山沢委員長

ほかどうぞ。山浦委員。

○山浦委員

27ページの決算の関係なんですけれども。

その先の4番というところ、2番目の中期計画とどこに違いがあるんですか。資金計画は、通常でいくとキャッシュフローだと思うんですけれども、これが、県の財務諸表は大分、違うんですが、これ、バランスシートのものを掲載してもらいたいなと私は思うんです。県の予算はそうなっているということでないんですが、信大なんかは、バランスシートのものがあるんですね。国立大学法人はですね。

だから何を言いたいかというと、ここに10億円、これがどうなっちゃうんだかわからないんです。これからの、将来にわたって使われてしまうのか、期限をつけて、1カ月を稼いでいくのか、全くわからないので、バランスシートのものをやっぱり掲示しないと、どういうことかお示しいただきたい。地方独立行政法人ですから。是非お願いしたいと私は思うんです。

○玉井専務理事兼事務局長

27ページ以降、財務諸表といいますか、これは意外とわかりにくいといいますか、同じ用語でも違う数字が入っておりまして、いろいろしまして性格が違う表という、一言でいえばそういうことなんですけれども、例えば27ページの予算というのは、これ現金支出を伴うもののみ記載しています。要は県の予算に倣ったような、予算決算に倣ったようなそういうものです。

ですから減価償却ですとか、そういったものの概念が入らなくて、28ページは、これはやや、法人の財務諸表の損益計算書をベースにつくられているものですので、必ずしも現金支出がなくても減価償却費とか、事業の減免の関係も、ここでいえば、計上含むといいますか、含んでいくという形になりますので、違う性格のこととなるということですね。

あと、資金計画はキャッシュフロー、御指摘のとおりでございますので、いわゆるバランスシートといいますか、貸借対照表というものをこの業務実績報告書には付けていないのですけれども、報告の中で財務諸表という形で、貸借対照表がありまして、そこに長野市からの出資金というものが資本として、資産計上されている、それをどう使うかというところもそこで出てくるのかなと思います。

○山沢委員長

ほかの公立大学法人もこのような・・・

○玉井専務理事兼事務局長

それに倣って行って協議をする。

○生駒委員

財務諸表にはバランスも開示されています・・・

○玉井専務理事兼事務局長

別途、報告させていただく財務諸表には、損益計算書と貸借対照表があります。

○伊藤委員

すみません、ちょっと細かい部分なのですが、今の予算のところでもやはり一番人件費、先生方、職員の皆様の人件費が一番多いのかなと思っているんですが。

初年度、専科の学生に対する教育の質というようなことを、それを運営する組織、そして組織を支える職員の方々が、いかに法人運営に対して方針を理解し、そこに情報をきちんとつかんで参加していくかということは、とても運営上、重要なことなのかなと思っています。

20ページのSD研修の参加には63%というのが、c評価ではあるんですけども、ここは意外と重要なことだと私自身は思っていて、組織の中で、先ほどいろいろな委員会の役員の一覧も拝見したんですが、非常にあらゆる委員会にお出になられている先生と、そういう意味で、先生方の中にこの大学に対する、関わり、それから関わる動機付けみたいな部分でも濃淡があるのかどうか。非常に積極的に、または中心的に動いている方々と、初年度の、しかも中期計画に（達成）目標として掲げられていて、しかも大学職員として、教職員として、開学間もないこの大学をどうしていくかということに対して、全部で131人でしたか、それこそいる中で113名ですか、60%の出席というのは、ちょっとこれは低いのかなと。これがもう、3年、4年経ちましたという大学として、もうこのくらいのパーセントというのはあるのかもしれないのですが、初年度の開学直後の参加率としては、濃淡があり過ぎるのかなと思って、大事なところは、私としてはもっと厳しく見る必要があるのかなと思っていました。

その中で、職員の確保がさらに進んでいて、21ページのところでは同意されていらっしゃるんですね。本当をいうと、まだ1学年しかいない年ですよね。学生数247人に対して、職員数が113人、いわば学生2人に対して先生1人という状況の中で、非常勤も26人確保で

増員されているということですね。ここで増員していく理由というのは、書かれていることは一見、もっともなのですが、費用的な部分も含めて、この初年度のことで、必要性が非常に強かったものなのかどうか、それだけでなく2年、3年、4年は、まだいない段階ですよね。そういうところで、ここがa評価になっているというのが、私たちには少し疑問なところではあります。

そういう意味で、組織体制をどういうふうにしていくのか、それから、実際に、委員会のときにも、その初年度は学生が1学年しかいないときに、4年分学生が全員揃ったときと同じ教員配置でないと文部科学省で通らないから、教員配置としては4年生までいる状態でスタートしていますと。その分、人件費がかかります。そうすると、その4年生まで全部学生がいない初年度においては、先生方は何やっていたのですかという話を当時伺わせていただいた思いがあって、そういう意味で、先生方がここで地域連携とか、教育研究へ向かってさまざまな情報発信、質の向上に関することとか、学生支援はもっともなんですけれども、17ページのところから地域連携がsとかと書いてあるんですが、4年生まで全部学生がいて、これならsかもしれないと思っているんです。でも、1年生しかまだ学生がいなくて、教員の方々は、もっとやはり積極的に研究のこととか地域のこととか、長野県のことも含めて、県立大についてももっともっと関わって、学生はまだ3学年分いないときに、魅力という意味では教員の方々がこのくらい動いていただくということは、最低限必要なことなのではないかと。ちょっと厳しいかもしれないのですけれども、拝見していて私自身は思いました。

そういう意味でいうと、教員同士の濃淡があるのではないかというような懸念と、それから、こういった地域連携についても一部の教員が積極的に関与されている気がする。

それから先程校舎の廊下の壁に貼ってあった学生たちのいろいろな感想や質問も拝見させていただいていたのですが、他のセンターとか他のところへ、学生のご質問に対するたらい回し現象みたいなものが質問に出ていて、本当にそれぞれのセンターの職員が、ほかのところでは何をやっていて、この大学はどういう大学で、それをこう自分たちが積極的に理解して、連携を取って学生をサポートしていこうというような方向へ職員が動いているのかどうかということについて、若干、濃淡が結構あるのかなという意味で、私は先程のところの、研修への出席率も含めて、ちょっと次年度に向けても、もう少し押さえていく部分もあるのではないかなと思いつつ、厳しめに見せていただきました。

#### ○金田一学長

今、いろいろご指摘、ありがとうございます。本当に、初年度の大学ならではの問題は、確かにたくさんあるかと思えます。

まず濃淡につきましては、確かに県短大の時からいる先生、そして全国から採用された先生、いろいろそういう違いがあります。それから若い先生、やる気のある先生、そしてある程度、文部科学省への申請を通さなければいけなかったのも、実力を持った先生方と、こういうところにもやはり違いがあるかなと思っております。

そういう中で11ページの62%という数字が低いのではないかという、ご指摘がございましたけれども、これは実は2回しか開いていなくて、文部科学省のワークショップと反転授業ということで、ある程度若手に向けて、研究費を獲得してほしいということと、それ

から授業の内容についてもこういう形を提案したいということで反転授業をやらせていただきました。

ですので、これ2回だけですので、どちらかという若手の先生方が確かに大勢来るような形になったのではないかと思います。

それぞれ半分以上の先生方が来ていましたので、おそらく、初め濃淡があったのかなど。半分以上、来ていたのにかかわらず、両方、どっちかに来ただけで62%という数字は確かに低いんですけども、それぞれ50%ぐらいずつは集まったのだと私は思っております。

これが低いと言われれば確かにそうかもしれませんけれども、来年度はもう少し回数を増やす、または、当日どうしても来れない方には、カメラで撮っておいて、録画を後で見させていただくというようなこともやって、来年度はかなり開催回数を増やすことを考えております。これが1番目に対する回答になります。ありがとうございます。

2番目の、17ページあたりで、ソーシャル・イノベーション創出センターはいろいろと頑張っているけれども、そのセンターでは教員や学生の活動はどうかという意見もあったかと思えます。

学生についての話があまりここに出てこないのですけれども、実は1年次の学生たちは全員寮で生活しておりますので、ソーシャル・イノベーション創出センターは、寮に窓口がございますので、寮で関心を持った学生たちがどんどんそのソーシャル・イノベーション創出センターの窓口に行って、いろいろ自分たちもやりたいというようなことを言います。それから象山未来塾でもそういった流れをつくっております。

実際、ここには書いてありませんけれども、1年生のかなり多くの学生が、ボランティア活動しております。地域のためのボランティア活動をやっておりまして、その9割の学生が、自分たちがボランティア活動をやってよかったという満足感を持っているというアンケート結果もありましたので、学生たちは学生たちで、それなりにこの地域への貢献をしているのではないかと考えております。

ただ、確かにこのソーシャル・イノベーション創出センターというのは非常に際立った一つのセンターでございますので、そこの活動というのは、一部の教員に限られてしまうというのはそのとおりで、しかし、これは長野県全体に対して大きな影響力を持っているという点では、かなり貢献しているのではないかと考えております。その辺を持って s 評価とさせていただいたということでございます。私からは以上でございます。

○山沢委員長

はい。

○玉井専務理事兼事務局長

実はこのSD、FDですけれども、ちょっと言い訳になりますが、年度計画の中に委員会において検討して実行するという文言があったので、そこに縛られて、実は実際やったことを書き込めなかったというのがあります。

例えば、SDの事務局職員研修等であれば、いろいろ事務的なスキルの研修は、事務局で内容を伺っておりますし、この組織というのはどういう組織なのかという研修についても、みんなでワークショップなりをやること、話し合う機会を設けたりとか、理事長・学



長と全職員が、何か年に一度、話し合うというか、そういう機会を設けて、課題が度々変わるの、職員が関わって情報共有する場とか、あるいは、今はこういうことをやっているんだというようなことを、次々やるようなことを考えております。

実はそういった活動は全てSDの活動なのではないかと思っていたんですけども、そう私は思いますけれども、一方、委員会の活動としては認識はそれまでに到らなかったことの形、あるいはFDのほうも、書いたのは2回なんですけれども、実はこのほかに、海外プログラムでのリスクマネジメントのワークショップみたいなものを開催しておりますし、財務システムとか、そういったものの研修会もやっていると、そういったことも全てやってはいたのですけれども、年度計画の文言は、そういったことを含めずに判断した結果という形にはなっております。

ただ、やっぱり初期の、立上げ段階の初期ですので、やっぱり事務局内部のいろいろな共有とか、方向性を合わせるということが極めて重要ですから、そういった活動、あるいは足りないものがあれば、それを十分理解する、やらなければいけない、ほかは何をするか、しているか、それに対しどう進むかとか、そういったものは極めて重要な話であると思っております。

あといろいろな、なるべく内部の活動で、教育機関のアンバランスといいますか、配置を、これは直ぐ着任できる方とか、いろいろな事情もございまして、こういう開学時の委員会ですのでそういう形になりましたけれども、これは数年単位でやっていきますと、必ず平準化していくものでございます。2年間の任期においてこれは変えていくものでございますので、同じことをずっとやり続けるということではございません。

先ほどのCSI（ソーシャル・イノベーション創出センター）の関係でございましてけれども、確かに限られた学生の活動にとどまらず、あるいは教員もそうかもしれませんけれども、やはりCSIがなぜこの大学にあるのかというのは、やはり教育にそういった活動を還元するためにあるということで、還元主体はおそらく、専門的に何か中心になってくるだろう、で、あれば、2年生以降の話が本格的に出てくるのではないかと思っておりますし、CSIの活動、フィールドワークを教育内部に還元していくということが、今後行われてくると考えております。

#### ○山沢委員長

ちょっといいですか。

評価とは直接関係ないのですけれども、県立大学では教員が70名ぐらいですよね。そうすると、私のいた大学ですと、1学部というか、そんなに大きくない学部と同じぐらいですよね。

これ見せてもらおうと、きちんと教員が1,000人ぐらいいる大学の組織になっているわけですね。70人か80人ぐらいだったら、教員を毎月集めて会議ができますよね。学部の教員会議というのは全員出席で、学部長もががやるわけですよ、これがおかしい、ここはこうすべきだと、そういう会議ができますよね。

だから、伊藤委員がおっしゃるように、濃淡はその辺から出てきてしまうのではないのかなと、やっぱり、金田一学長が教員会議でみんな集めてこうしろときちんと言うというのが非常に重要だと思うんですけども。

評価というのとは全然関係なくてすみません。今聞いていて、大きい大学のシステムだ  
と思うのですけれども、70人くらいですから、どこでも動きますよ、パシッと。

沼尾委員どうぞ。

#### ○沼尾委員

ありがとうございます。今日お話を伺って評価をしていくということで、私、まず資料  
をざっと見せていただいた印象なんですけれども、本当に新しい体制で、さまざまなプロ  
グラムがありますよね。留学もそうですし、地域貢献もそうですし、短大からの移行とい  
うこともあって、新しく体制をつくって、1年間、無事故でつつがなくまず回していく  
ということで非常に大きなチャレンジだったのではないかと思います。そう考えますと、計  
画に沿ってアウトプットについて、ある程度、形を整えることができたということで、今  
回に関しては、まずアウトプットがきちんと計画どおりに、つつがなく行われたのかとい  
う、量的なところを中心に評価していくということでよいのではないかという印象を、私  
自身は持っています。

ただ、そうはいっても、やはり、中で自己評価をしながら、ここはそのアウトプットの  
面でももう少し磨いていかなければいけないとか、ここは非常に成果が上がったという  
ところも含めて、いろいろ濃淡がある評価をされてきたんだと思うのですけれども、これに  
ついて今後、年を重ねていく中で、どう考えていくのかということも含めて、若干、気  
になったことがあります。

まず一つ、今のFD（教員研修）の話ですけれども、大学というところに所属している  
ときに、例えば教育研究という一つの組織に所属した一員として、あらかじめ何かその組  
織の目標に向かって研究をしていくということ、あまり研究者は考えていない。つまり、  
大学といえはある種のプラットフォームで、そこに「ひとり親方」的に専門意識を持った  
人たちが集まりながら、結果的に、共同で何かを、クリエイションしていくという、マイ  
ンドで考えているスタッフが多いだろうと思います。

本当にいろいろな分野の人たちが集まっていますから、プラットフォームというのは非  
常に有効に機能して、そこで出会いがあったり、議論があることで新しいアイデアが生ま  
れたり、何かクリエイティブにつながっていくとすれば、それはおそらく一人一人の研究  
者の人たちもすごくおもしろがっているいろいろな会合にも出ていくであろうと思いま  
す。

今回おそらく、FDというのは、まず形を整えなければいけないし科研費も取ってもら  
わなければいけないし、ということで、研修について2回チャレンジした、取り組まれた  
んだと思うのですけれども、こういう形でその組織としてのミッションがあって、「はい、  
この説明会に出る」という形で出るというのはなかなかやっぱり、研究者としてはしん  
どいところもあるのではないかと思います。

そのあたりのFDの仕掛けとしては、今、いろいろな大学でいろいろな工夫をしていま  
して、やっぱり教育に関してもそうですし、その異なる分野の、例えば専門職の人たちが  
どういうふう集まって、何かクリエイティブなものをつくっていくのかというような  
ところで、そこに教育という要素も入れるような、講習会をどうするとか、いろいろなや  
り方があるということと、あと、これは今後の評価指標の問題に関わることですけれど  
も、実は私が所属している大学では、各授業の学生の達成度というのをどういうふう  
に図るの

かと、つまり1年次に入ったときから4年経って卒業するときに、これだけ学力が上がったとか、これだけその社会人基礎力が上がったというようなところをどういうふうに指標化するかというところで、今、民間業者が開発しているような、社会的基礎力テストのようなものを取り入れて、キャリアデベロップメントの評価をしようとか、そういうことを、今、取り組んでいます。

そういったことに関する研修とか、教育のあり方をどうするかということディスカッションするようなFDを入れたりということで、それを例えば教授会の前の30分で、みんなで残りが出ないようにして実施するとか、そういう形にして、FD研修参加率100%目指しつつ、そこである意味、クリエイティブに、ストレスをためずにみんなで議論しながら、次の教育や研究を考えようというような場をつくったりしています。なので、何かそういうことを考えてみるということもあるのではないかと思います。

あと、それから、つまり、次は些末なことなのですが、発信力ゼミが1クラス16人で、英語が1クラス24～26人という数字を見た段階で、これはおそらくクラス分けとか、小回りが大変だっただろうなということが想像つくんですけども。

このように語学と入門ゼミみたいなものの数が違うときに、クラス分けをどうしていくかということも含めてシステムをどうつくるかとか、そのクラス分けをするのを職員がやるのか、教員がやるのかとか、そういうところで実は事務量にすごいストレスがたまることがあると思うんですね。

そのあたりが、実はその大学に入れているそのシステムですよ、自主登録とか何かをやる、システム開発の業者との関係って実はものすごく重要になってきていて、そのあたりのところが、実際にやれているということが気になっているんですけども、今後のその事務効率というのを考えるときに、こうしたクラス分けのあり方とか履修登録のあり方とか、それを効率的にやるためのシステム開発業者との関係性とか、ぜひ何かそういうことも次の計画とかにつなげていくような形で考えていくということが大事なのではないかと思いました。

そして、もう1点だけですね、そうすると、次に先ほどの留学だとか寮について、非常にその満足度が高いということなのですが、やっぱり中には精神的なことでもちょっと海外での経験がしんどいとか、ちょっと留学に参加できないとか、寮での人間関係がうまくいかないという子が、必ずといっていいかどうかわからないのですが、出ると思うんですね。そういうところへの対応をどうしていくかということのほうが、トータルとしての満足度が高かったということとは別に、実はリスク管理として大変重要でして、そのあたりについても何かぜひ言及してほしかったというところがあるので、何か、対応について、ご教示いただければなと思います。

#### ○山沢委員長

具体的には、臨床心理士を配置していると思うのですが、大学、ここの振り分けがあったかもしれないけれども、大学に養護職員の方がいるのかとか、その辺は対応ができていますか。

#### ○金田一学長

去年、理事長が、随分対応していました。

#### ○山沢委員長

例えば、今、沼尾委員がおっしゃられた、どうしても全体になじめない学生というのが、それは、ふつうは臨床心理士が学部、あるいは大学にいて、ここは寮生活というのがあるから、もう一つ、違う観点の臨床心理士もいるのではないかなと思って、両方配置しているのかなと。

#### ○事務局

確かに、御指摘のとおり、海外プログラムと寮生活について、やはりそういう種類のリスクが高いというか、起きるだろうなというような想定をしておりますので、確実に学生コールセンターに配置した臨床心理士に来ていただくように、あるいは今年は、一部で外部からも来てもらえるような形ですとか、そういった体制を取るといふのと、海外プログラムについても、グローバルセンターのほうへ個別の支援をやるとか、そういう非常に、結果だけでは見えない、関係を経てやってきております。

あと、FDに関連したところでは、確かにご指摘のような、FDのバリエーションが、いろいろあるかなと思っておりますし、学習の成果をどのように学生ご本人とか、あるいは保護者会に対して見せていくかという、非常に重要な議論だと思います。

昨年度については、そのことはなかなか手がつかなかったというのが実情ですが、多少、議論としては始めているところでもございます。

#### ○金田一学長

大変、いろいろ質問、貴重なご意見ありがとうございます。とても助かります。

実は、今、海外研修を行っている最中でございます。先ほど、やはり課題が見えてきたという話をしましたけれども、やはり実際やってみると、先生方のご苦勞というか、かなり大変な時間がかかっていたということが、やって見てわかるようなことで、そういう意味で、来年度以降どうするのかということも、これから考えていかなければいけない。

そのときに、一番問題だったのは、やはり精神的な問題があつて、中にはなかなか海外に行くことが難しいような学生もいました。でも一応、うちは全員参加を目標に掲げておりますので、その辺でかなり苦勞をして免除なり、来年度以降、どうするのかについて、今、検討が始まったところでございます。是非、これがいい形でやりたいと思っておりますけれども、第一の看板のプログラムであり、全員参加ということをやっと掲げてきたものですから、これは是非、理解してやりたい。また、行けない学生をどうするのかということもきちんと文部科学省にも納得していただけるような体制で行うということを考えております。

先生方が、70人ということですが、健康発達学部のほうはそれでも半分近海外プログラム期間中もいて、学生数は70名ですからいいのですけれども、どうも、グローバルマネジメント学部のほうは、先生が一箇所に2人ずつ以上でいくと、これは大変で、ほとんど留守中の授業ができないというような状況がございます。

そういうこともやってみてわかることであつて、来年度以降は、この1年目でこれだけ

経験すれば、2年目はそんなに全員が行かなくてもいいだろうということもあったものですから、いい形で、来年度を迎えられると思っていたので、それにしても負担が大きかったということも一つ、これが今、大学の課題になっております。

そういうことで海外研修をいい形でこれから続けていくつもりでございますけれども、この課題をどうやって取り除くかは、ぜひ皆様方からもご意見を、アドバイスをいただきたいと考えております。

全寮制のほうは、かなりうまくいっております、これもリスクをかなり抱えてはおりますけれども、今のところ別に、お酒を飲んだとか、帰ってこなかったとか、そういう学生はいませんので、そういう意味ではうまくいっていると思います。今年は先程、事務局長からも、ご夫婦の方に寮のほうを見ていただくような形で、今までは警備の方でやっていただいたものを、ちょっと変えるというスタイルをとって、非常にうまく寮の雰囲気をつくって、やわらかくするという形を取らせていただきました。それから2年生が一部入りますので、一昨年に比べますと、寮生活はスムーズに行くだろうと考えております。

それでも、やはり寮生活が無理だという学生は、やはり当然、一人、二人いらっしやると思うんですけれども、そういう学生については、また別に考えていきたいと思っております。

それから英語の授業と発信力ゼミのクラス分けが、人数が違うということの問題は確かにございます。英語はやはり、英語の先生方の人数から学生の人数を割り出すしかないということがあります。発信力ゼミのほうは、やはり1年次のゼミというのは、1クラス15人が最大人数だろうというのが私の経験から来た数値でございます。ですので、これから合わせるのが難しいということがございます。その辺、合理化ができればいいんですけれども、なかなか難しいということがございます。

それからFDについても、是非いい形でやっていきたい、それから月1回の教員会議、これも今、一部やっております。そのときに私が出席していなくて、学部長が頑張っておりますという形でございます。ですので、あまりそこにしゃしゃり出ないほうがいいんじゃないかということで、私は後ろにおりますけれども、でも必要があれば、当然、もちろん出ていくつもりではございます。

そういう意味で、本当に1学部にすぎない、信州大学と比べたら学生数が10分の1の大学ですから、その、むしろ良さをうまく生かしたい。それで、委員会があそこは多いというのは逆にいうと、委員会に時間を取られるというのは教員にとっては大変負担になりますので、委員会の数はなるべく減らしたいということも考えております。

その辺、まだ手探り状態ですので、是非、いろいろとアドバイスをいただけたらというふうに考えております。どうもありがとうございました。

#### ○生駒委員

教員の質の向上、教育の質の向上に関連して、2ページと12ページに必要なことが書いてありまして、教員会議とか、専任の教員を対象としていると、月1回、そして授業参観によって教員からの意見交換を行うとあります。ここが非常に質の向上には欠かせないことであると思うんですが。

私、非常勤講師をやっていた立場からすると、非常勤講師の先生方が、このコミュニケーションにどの程度かかわるのかということなんですが、要するに非常勤は、先程のお話

のように教員は独任制で、もう授業や成績評価から何から任せられているんですね。しかし、教育はその各学部、そういう教育科目のまとまりがあつて、学部として一丸となつて取り組む、教員が一丸となつて取り組むべきものなので、非常勤、この大学では先程の話では教員数69名ですが、非常勤講師を含んでいる数字か含まない数字かわからないんですが、かなりの大学で非常勤講師の割合が高くなつていくということで、非常勤講師を除いては教育の質は維持できない、うまく行かないんですね。ですから、その辺をどのようになさっているのかをお尋ねしたいと思います。

#### ○金田一学長

非常勤講師につきましては、確かに、この長野県で広くこういったことは、かなり難しいということもございます。うちの大学は、もう信州大学があつて本当に助かつております。信州大学の素晴らしい先生方に来ていただいて非常勤をやっていただく、これがもう本当にうちの大学では、こんなに恵まれた環境はないと思うんです。ただ、東京と違って、やはり非常勤講師は難しいということで、特に英語ですね、英語に関しましては、非常勤講師にもやはり一緒に授業に入つていただく、ここまで一応、4回の授業を、1年次にきちんと教えるためであつて、非常勤講師の方にもその授業のやり方については一応、出ていただいてこう、または講義でやってほしいというようなことをちゃんと要望を出すような形を取つております。そうしないと英語の授業が進まないというのが実情でございます。

確か英語の一番最初のところで、8ページの一番下のところにbがついているもの、これは本教育システムを利用して、かなり英語の集中プログラムはうまく進められていると思いますので、これは本当はaをつけたかったんですけども、たまたまこう、採点のところでもうまく調整がとれなくて、一人の教員がちょっと、違うレベルで採点をした方がいらっちゃつて、そういうところで混乱が出てまいりました。

この教員については、私のほうから直接会つて、ここはこういうふうにやってくださいというお願いをいたしましたので、来年度からは大丈夫だと思うんですけども、この8ページの一番下のところで、ちょっとbがついてしまったというのは、授業のやり方としてはとてもうまくできていたと思うんです。ただ、最後の点数づけのところでも少し問題が起つてしまったということによって、bとなつたと私は理解しております。

うちは英語も大変重要で、TOEICも毎年こうやっていきまして、外で見える形で評価するという、そこが見える形を取りたいということで頑張つておりますけれども、そういう意味で、英語の授業の内容自体に、点数を一桁違う評価をつけるということも難しい。ただ、英語はレベル別でやっていますので、レベルごとにどういう評価をつけていくかを、一応先生方で確認をとつていくというやり方がやっぱり大事かと思つております。この辺は是非、非常勤講師に加わつてもらつていますので、そういうことについてはちゃんと、意思の疎通を取りながら進めているということです。

ただ、総合教育科目とかそういう担当の非常勤の先生方に、どこまで大学のやり方に沿つた教育をしていただくかというのは、なかなか難しいところもあるかと思つておりますので、その辺、非常勤講師の方と、公表すること自体はいいと思つておりますけれども、そういう形で取るのがいいのかということが、ちょっと僕のほうでは、年に1回、指導の先生方に集まつていただいて、そういう話をする、そういう形でいいのかどうか、その辺、ちょっと伊

藤委員のイメージで、よくわからなかったんですけれども。

○生駒委員

私の経験では年に1回ですね、採点の問題とか、シラバスの書き方とか、それを含めて、非常勤講師と常勤の教員が全体で集まって学部ごとにわかれて、そういうコミュニケーションを図る場がありました。それはつまり、それだけで十分かということ必ずしもそうではないということを感じていたんですけれども。

偉い方々が来られて、大学の崇高な精神のお話で終わってしまうんですね。今年の授業、学生はこうだったと、だからこういうことがあったので、来年はこの点を改善しようかというところまではいかないのです。

だから、組織的にそんなところまでやるかというのは悩むところだと思うんですけれども、少なくとも学部毎に教員全体（非常勤も含めて）で授業の方針の確認と結果の反省と今後の対応を含めてコミュニケーションを十分取る必要性を感じておりました。

○金田一学長

是非、コミュニケーションは大事ですので、取るように努力いたします。ありがとうございます。

○山沢委員長

コミュニケーションをすごい取っている授業もあるんですよ。私、非常勤講師を信州大学でやっているんですけれども、2週間に1回、授業打ち合わせ会というのがあって、大学へ行って、授業は正解のあることをやらせるのではなくて、先程レポートとか、そういうのが主になりますんですね。先程の話も、「評点の基準」というのをきちんとルーブリックで公表しているんです、学生に。そこでもう点数をつけていくと、そういうことは最低でやって、それを頻繁に打ち合わせをしながら、お互いに自分が教えている学生の評価点が見えるようになっていきますので、それで、あなたの点数が課題じゃないかとか、どうしてそういうふうにするんだとか、そういうのを2週間に1回、がんがんやられるんですね。

詳しくは大学の金子課長が多分、よく知っていると思いますので、そういう授業もあるんですね。だからこういう新しい大学はそのようなやり方も、黙っていても正解が出てくるのを丸・バツだというんじゃないものが多いですよ。是非、おっしゃったようなことを、是非頑張ってやっていただきたい。

○金田一学長

発信力ゼミは、授業のあと、毎週水曜日に先生方が15人に集まって、話し合いをやっております。

○山沢委員長

この授業には、そこは非常勤講師はいないんですか。

○金田一学長

そこは非常勤講師なしでやっています、専任だけで。

○金子課長

(山沢委員長のおっしゃる) 信州大学では大学修学ゼミです。

○金田一学長

これは、とても大事な授業なので、専任で、皆、担当しております。

○生駒委員

ちなみに、今、この教員数というのは専任だけ、非常勤講師の方というのはあと、どのくらい……

○山沢委員長

25とかぐらいで。

○生駒委員

非常勤講師の方って、あとどのくらい、要するに何割ぐらい。

○山沢委員長

25くらいですか。

○生駒委員

非常勤講師の方は24~25人ですか、そうすると。

○事務局

ほかの大学と比べて、専任に教員率が高いんですね。

○生駒委員

教員全体のうち25%が非常勤講師ですね。

○沼尾委員

今の成績評価の関係でいうと、GPAが、今、留学のときの、結構、申請で、何点以上でないと、ということに関わってきて、昔の大学の成績って、その後cとか、ほとんど関係なかったんですけども、最近、海外の大学や大学院への留学時に、GPAの成績が出てくるので、なかなかやっぱり、絶対評価がもうできにくい事情になっていると。大学の中には、例えば成績をつけた後に、例えばsは何%から何%とか、aは何%から何%に収めてくれということで、そこからもれる場合には、ちゃんとその理由を説明できるようにというようなことで、管理する大学も出てきたりしていて、そのあたりがちょっと、今、昔とかなり事情が変わってきているということも含めて、何か先生方に周知されるといいのではないかと、ご存じない方もいらっしゃるのでは、ということがありますね。



ちょっと1点、教えていただきたかったのが、12ページのところで、この象山未来塾のところで、アンケートの提出、100%とあるんですけども、これ提出されたのは何%ぐらいなんですか。

この書き方は結構微妙で、ある程度出したのが何割かというということがかなり重要なんですが。

○事務局

象山未来塾、延べ129人ですが、アンケートが129人なので全員出していただいているということです。

○沼尾委員

そうなんですね。そうしたら参加者も100%ということでもいいですね。そう書いてほうがいいと思います。

○山沢委員長

他はございませんか。何かありましたら。

○生駒委員

ちょっと、今の学生はバイトに精を出していて、あまり勉強時間をほとんど取れていない、本業である学業が疎かになっているんじゃないかということがいわれているんですけども。

この10ページに予習復習について、シラバスに記載することというふうに、学務システム等を用いて学生に周知すると。

学生、周知していくことによって、学生は自主的に、自主制に任せられていると思うんですね。その勉強の時間数なり授業の参加具合は、試験の成績に表れるのかもしれませんが、1単位45時間という時間が要求されている中、授業のほかに予習・復習、大事だと思うんですが、それを促すような取り組みというのは、どのようなことをされているのでしょうか。

予習・復習の管理は、野放しなんでしょうか、お伺いしたいと思います。

○事務局

シラバスに、今、事前学習・事後事後という形で、各教員がシラバスに必ず載っけなくてはいけないというあれが、いろいろ学習の可視化とかのところできちんとやっていて、今、先生がおっしゃるとおり、それをどのように我々大学全体が管理をしているかというのは、今はそのシラバスを借りて教員が管理をいただいているという感覚になっています。

シラバスにはきちんと事前・事後の学習を、どういうものがこの科目では必要かというのを、学生に対して明記するというのはやっているというふうな、今は、そういうことでございます。

○生駒委員

アンケートを事前授業で・・・

○事務局

学生の授業評価アンケートというのを、今、取ってまして、そのところに事前・事後のものがどうかというのは、今、項目にはそこは入っては具体的にはないんですけども、授業評価アンケートのところにそういうような、学生評価のところの項目にそういうものを入れるのも、一つの手かなというふうには思っておりますけれども。

○生駒委員

10ページのところにですね、学務システム等利用した課題提出等により授業を主体的に参加を促し、学生の授業理解を深めたと書いてあるんですね。

この、ITを利用したかどうかはわかりませんが、こういった事前の課題提出とかは、これは促す方法の一つだと思うんですけども、これが十分に行われているかどうかというのは、大きな課題だと思うんですね。

この学務システムを利用されていますか、先生によっては苦手な人、使っていない人はいませんか。

○事務局

この学務システムは、シラバスを学務システムに入れて、それを見ながら学生が全て履修登録をしていきますので、これは学務システムとシラバスといったものは完全に連動して、学生が事前にそれをきちんと見てもらうというような形で、学部のシステムの、学生の活用というのは徹底しているというような形にはなっております。

課題提出とかも、ここであるところに学務システムでそういうようなシステムの用途があって、教員の方々の使い方ですべての事前の課題、あるいは提出とか、あるいは授業中にそういうような文言の課題提出というものも、授業中にもできますし、事前・事後の課題提出とかも、この学務システムでは教員の方々に活用してもらうという形で、その学務システムの活用方法の徹底というのを、まだまだもう少し、新任の先生とかにやっていかなければいけないと思うんですけども、十分、その課題提出というのは、このシステムでできるようにはなっております。

○生駒委員

できるようになっているというのが問題でして、その活用の度合いを評価システムにぜひ取り入れて欲しいですね。で、評価にも使ってほしい。

○山沢委員長

ほかはございますか、どうぞ。

○山浦委員

興味本意みたいな話で大変申し訳ないんですが。

2番目のキャリアのカウンセリングってあるんですが、自分の学生時代のことを考えると、こんなことひとつも大学で考えてもみななかったし、多分、みんなが決められるのは、具体的にどんなようなことを入れてあるのかということをお聞きしたい。それから、そんなことはだめだと思うんですけども、そういう、大学では、自分の大学は長欠とかないんですね、これ、その辺がどうなっているかとか、授業の出席率とか、欠席率とか、どの程度何かわかるものはあるのですか。私は個人的に言いますと、この大学に入ったら息がつまりそうにそうだと感じるんです。大学に行った感じがしないんじゃないかというふうに思ってしまうんです。

今の学生さんは授業はやたらまじめに出るといふことのように、我々の時代とは全く違うというと思っているんですが、私の個人的な意見を言えば、出席率は、全ての学科の50%ぐらいしか出ていなかったんで、その辺が今、どうなっているのかと、大変興味本位で申し訳ないんですが。

#### ○金田一学長

お答えになるかどうかわかりませんが、私、新入生全員に、5分ずつ面談をやってみてわかることなんですけれども、まずグローバルマネジメント学部と健康発達学部と2つあるんですけども、健康発達学部のほうは、非常に将来が具体的で見えている方が多い、ところが、グローバルマネジメント学部のほうは、夢はある学生もいますけれども、よくわからないという学生が大変多い。そういうときに、それが悩みだという学生には個人的にキャリアセンターに行って、きちんと相談を受けなさいと言います。

こっちからこうしろ、ああしろというのではなくて、あくまでこれは支援であって、まず自分はどんな人間なのかを考えるとところから始まって、こう、どういう仕事があるのかというようなことを考えている形になります。

それともう一つ、面談をやっていると思うことは、「私はここは第2希望です。」という学生が結構います。しかも堂々といいます、はっきり。恥ずかしげもなく言います。

つまりセンター試験で思った点数がとれなかったと、だからこの大学を受けに来たんだと言います。そういう学生には私は、「せっかく来たんだから、この大学はまだ実績も認知度もないけれども、この新しい大学はこれから化けるから、必ず、お前が行きたいと思っている、その第一希望の大学よりも上になるはずの大学である。」と、「これは教員だけが頑張ってもだめだ。君が僕と一緒に頑張ってくれるならできると思う。」と言うと、やっぱり今の若者は割と純粹で「はい、先生、頑張ります。」と、言ってくれる学生が結構多いんです。

一期生のときは、「私がこの大学をトップに変えます。」という学生が結構いたんです。二期生は多分、そういうことがないかと思っていたんですが、二期生も結構、自分が何とか、この大学をトップにしたいと言ってくれる学生がいたので、私は結構、その言葉を信じております。

ですので、(他の大学では) 退学してほかの大学に行ってしまうというケースもありますけれども、うちの大学は、せっかく来たんだからここで頑張ろうよといって、一緒に頑張るよといってくれる学生がいるということは、これはやっぱり最初に面接した意味もある

のかなとっております。

ですので、キャリア教育を含めまして、この大学でこう、みんなが気持ちを新たにして、気合を入れて頑張るといふように、特に中期日程入試で入ってくる学生は結構、頭のいい学生が多いです。最後に受けるのが中期日程入試なのですけれども、そのときはやっぱり、どこかに落ちてきている学生が多いのですけれども、そういう方々は偏差値はすごく高いです。それだけに、他の大学を来年も受けたいと思うことが多いのですけれども、「せっかく新しい大学でチャレンジするという、その気持ちを持っていただければこの大学に来た意味があると思う。」と私は言っています。私は学生に面談の場で、それを確認していて、是非うちで頑張りたいと言ってくれる学生が多いので、そういう意味でも、面談の意味はあると思います。答えになってないかもしれませんが、そういうことでございます。

○山沢委員長

他はございませんか、一応、だいぶ時間が過ぎましたけれども。

○生駒委員

最後に。このままではb評価になってしまうというところがあって。22ページなんですけれども。

自己点検・評価の実施についての項、a評価の判断理由なんですけれども、この記述を何とかしてほしい。

今、始まっている2019年度の自己点検評価に向けて具体的に詳細を検討したと、これだけでaなのか、要するに、自己点検評価というのが、課題を把握して改善して初めて効果が出てくるのであって、このサイクルには、回っているはずなんですよね。年間を通じて、その改善点とか、そういうことは書かれてなくて、検討しただけでaだというんですが、ちょっとしただけでaというのはおこがましい。やっていることを書いてください。

○事務局

ご指摘なんですけれども、これは法人自体はaだと思っていて、というのは、年度計画において、これ事後点検評価に向けて検討するというところで、検討したということでこれは完全に実施したという意味合いでaだと。

ただ、委員のご発言の中でPDCAサイクル、もし、改善点をここに書くべきだという話もありましたけれども、ここは、ほかの判断のところではいろいろとa評価なり、b評価なりつけているところを改善していくんだらうかと、私は思っておりますけれども。

その多分、次年度なので、反映の仕方が、おそらく来年度の年度計画等に反映されていくというもので、それで私はPDCAサイクルが完成されると思っています。

それが長く6年間という中期計画期間の中で、ここが反映されていくということなので、ここに必ずしも全部書き込まなくていいのかなという判断が大学の判断でございます。すみません。

○山沢委員長

どうぞ。

#### ○沼尾委員

時間もきていますが、すみません、最後に1点だけお願いします。

先程申し上げたとおり、大学って必ずしも教育サービスを提供するということではなくて、1 Semesterなり、1クォーターを得ることで、一定のゴールがあって、そこまでの学力が身につくという、それに対して、例えば出席率何%と、テスト何%とかで、これだけの点数をつけるということは、ある種、契約をするということなので、そのとおりの、その契約に沿った評価を教員がしたかどうかというところが、私の大学ではすごく厳しくチェックをされているんですけども。

そのときに、先程のそれを事務方とか教員のほうでしっかり管理するという話もあったと思うんですけども、やっぱり大学というのは、なかなかその象牙の塔で、それぞれ専門研究者が自分の判断でやるというところから、もう少し、ちょっとオープンプラットフォームに意識を変えて行く必要があって、そこはある種のコントラクトだとすると、本当にそのとおりにという評価がされたのかということに関して、学生も例えばクレームをつけてきたりですとか、あるいは、学生がオフィスアワーのときに来て、つまりどこで点がとれなかったのかももう一回説明してほしいとか、そういうところに対して、やっぱり説明責任ということがすごく求められてくると。

ただ、それを丁寧にやろうとすればするほど時間もかかるし、手間もかかるという中で、それを実施する体制として例えば大学院生がいたり、助教がいるところであれば、それをかなり、その助教がある程度担っていくんだけど、それができないとしたときにどうするか。

ティーチングアシスタントが難しいとすると、これ寮についてはレジデントアシスタントが寮生支援の仕組みになっていると思うんですけども、例えば授業のところ、上級学年のほうで何か授業を、例えばうまくサポートするとか、何かそここのところのマンパワーをうまく補いながら、そのオープンプラットフォームとして、学生が例えば教員に何かをきちんと聞けるとかというような仕組みのところを、上手に参加型でやっていけるような工夫というのを、すぐにできるものではないかもしれないんですけども、考えていくということが、この計画をさらに充実したものにしていく上で大切じゃないかなという、お話しさせていただきます。

#### ○金田一学長

SA（スチューデントアシスタント）とか、または外の人を入れるというようなことも若干考えております。

#### ○生駒委員

先程の説明に対して。玉井事務局長からの初年度、今、30年度の計画に対してはこれでもいいのかということなんですけれども。具体的に評価を検討し、2年間で、これももう少し付け足してみたらどうですか。検討しただけで終わっているの、a評価というのは、私はどうしても納得いかないんですけども。

実際におやりになったんでしょ、最後に、それを全部書いてくださいとは言いませんが、もう少し書きようがありませんか、a評価にする、書きようがありませんか。

○山沢委員長

まだ、下に3行ぐらい空間が書けるんですが、具体的にも、○○を具体的にしたとか・・・。

○生駒委員

具体的にしてですね。要するに1回だけで終わりましたというのでaですか。

○山沢委員長

あとは資料を見てくださいというイメージですね。ここは頑張らなくちゃいけない。

○県立大学事務局

実は公表段階になっておりまして、これ、実績等は、もう既にオーソライズされ公表になっています。

ただ、法人としては、検討したということであればaであろうと。要するに実施、100%の意味合いの評価なんですけれども、ご指摘を踏まえて、来年度以降どうするかというのは、それはそれであると思いますが、ここにずっと挙げると、相当ここはボリューム感満載になるかなという感じもしますので、それはちょっと工夫が必要かなと感じがいたします。

○生駒委員

これはもう公表されているんですか。会社の決算書と一緒にですね。評価委員会の評価と関係なく公表済みなので、この場で意見を述べても書き振りを改めることができないですよ。

○山沢委員長

すみません、よろしいですか。最後のご質問はよろしいですか。

いろいろご意見、ありがとうございました。

それでは、今日の評価委員会を終わりにさせていただきます。

今後の評価に向けてスケジュールがございますので、それを4の報告事項で説明していただくということになるかと思えます。それでは、よろしく願いいたします。

## 5 その他

○事務局

それでは、今後のスケジュールについてご説明申し上げたいと思います。資料の6をご覧ください。フローのような感じでお話したいと思えますけれども。

まず今日が7月16日の第1回での審議を経まして、これをもとに作業がありますが、7月23日くらいまでかけまして、評価をつけていただくことをお願いしたいと思います。そ

して事務局で集約をいたしまして、委員の皆様の評価を持ち寄って、それに従って2回目の委員会を開催させていただきます。そして法人へ、次に評価書の原案というものを提示するわけですが、できるだけ8月の20日ぐらいまでに行いたいと思っております。

法人のほうでは8月上旬に、その検討をいただきまして、申請のほうの手続きを行いまして、最終的には委員会としてのコメントなども含めて、調整をしていただきたいと思います。その段階で、大変恐縮ですが、お盆中になってしまうと思うんですが、その後にございますような、一つの報告書の形式の案を事務局で作成して、案のほうを委員にお送りしたいと思っております。

そしてそれを踏まえまして、第3回が8月19日でございますけれども、実際に公表バージョンであります、上のほうの評価結果報告書、それからその次の項目別、評価案確認ということを見せていただきまして最終にしたいと思っておりますが、その後でございますけれども、9月中旬めどでございますが、今のところ9月17、18日ぐらいを予定しているんですけれども、委員会として委員長から知事に報告書が提出されるということで、それを経て、この9月の議会で報告書を印刷物として反映いたしまして、報告をするというような、大きな流れとなっておりますのでございます。以上でございます。

#### ○沼尾委員

コメントをということなのでございますけれども、これ法人評価と異なる場合についても、何らかのコメントとする必要があると。

と、申しますのは、私、ちょっと今日、勘違いしていたんですけれども、ここを全員、委員がコメントを書くためには、一つ一つ、こういう客観的事実からaにした、sにしたということが、1個1個の項目について、全部説明をずっと聞くのかなと思ったんですね。ただ、その具体的な説明が何一つ出てこないままなのか、ざくざくざくと、こうした説明で行ってしまったので、ちょっとどういうふうにちょっとコメントしようかと思っても、なかなかちょっと、またそれを裏づけるような資料を積み上げた、数字を積み上げたということだったんですけれども、例えば、私、昔、内閣府の独立行政法人の評価をやっていたときは、その積み上げの資料が別途ポンと差して出てきて、それと確認しながら全部つきあわせをやって、評価をしたという経緯があって、その積み上げた資料の数字もなくて、個々の客観的説明も今日ないまま、ちょっと1個1個コメントを書いていくということはかなり難しいと思うんですが。

#### ○山沢委員長

全部じゃなくてもいいんじゃないですか、コメントできるだけのものでも。

それで、逆に自己評価と違うものが、本当を言えば、私も見ていて、これbじゃないかなというのがちょっと、こう考えるのがあって。その辺は、いただいたコメント、そのまま載せるというふうにするといういろいろありますので、きちんと、証拠がきちんと出ていないようなものはこちらで載せるわけにはいきませんので、そこはきちんと対応したいと思います。

できましたら自己評価と違う評価点、これは違うよなというのはコメントをいただきたい。違うというコメントでもいいと思うんですが、だってそれ証拠がないんだもの。

いや、ここはもっと違う証拠を出して、a と言ってくれとかというふうな言い方でもいい。まずは、事務的な中でよろしくコメントというふうにししましょう。

○沼尾委員

それで次回・・・

○山沢委員長

1 回やりますそれは事務的にやりますよね、そのコメントを、この委員会の中で出してきて、これはどうだということではできますか、機会はありますか。

○事務局

そのように考えております。

○山沢委員長

ありますか、はい。

○沼尾委員

ありがとうございます。

○山沢委員長

よろしゅうございますか。あと資料 7 の説明は、説明というか。

○事務局

では、資料 7 でございますけれども、既に書面表決がありまして、もうご了承いただきました内容の報告でございます。

大学が使わないということで、不要財産となる土地を、県の土地に、ということがございました。北西及び南東の部分の表記ですけれども、これを長野市の市道として提供するというようなことをご審議をいただきまして、おかげさまをもちまして、皆さんの了解を得られましたので、締結をさせていただくということが報告です。

なお、この案件につきましては議会の議決が必要でございましたので、去る 7 月 4 日まで行われた 6 月県議会におきまして、議案として提出をし、無事、県議会の議決も得たところでございますので、あわせてご報告申し上げたいと思います。以上でございます。

○山沢委員長

以上、議事に載っておりました報告事項 4 まで終了しました。

私の役目はここまででございます。

事務局にマイクをお返しします。よろしく申し上げます。どうもありがとうございます。

5 その他



○新井企画幹

山沢委員長、ありがとうございました。次第の「その他」でございますが、ご出席の皆様から何かございますでしょうか。

よろしいでしょうか、次回委員会につきましては、先ほどご説明したとおり、7月31日、第3回につきましては、8月19日に予定しておりますので、短期集中での開催となりますが、委員の皆様、ご協力をよろしくお願いいたします。

## 6 閉 会

○新井企画幹

それでは委員の皆様、県立大学の皆様、本日はありがとうございました。

以上をもちまして、評価委員会を終了いたします。ありがとうございました。